様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：１８００１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ１２３５１

研究課題名（和文）妊娠期における心身の出産準備を支援するセルフケア・アセスメントツールの開発と評価

研究課題名（英文）Development of selfcare-assessment tool promoting physical and mental birth preparation in pregnant women

研究代表者
大嶺　ふじ子（Omine, Fujiko）

琉球大学・医学部・非常勤講師

研究者番号：４０２９５３０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：妊娠期に1対1の助産ケアを受けた女性10名と女性を支援した助産師10名を対象に半構造化面接，質的分析を行い，妊娠期セルフケア・アセスメントツールの開発・評価を行った．妊娠期セルフケアは，身体面の【妊娠期の身体づくり】【母児を育む栄養】【母乳育児の備え】，心理社会面の【お任せにしない私のお産】【児への愛着】【1対1の助産ケアがもたらす時間と空間】【妊娠生活を楽しむ心の余裕】の7カテゴリー・32項目を抽出，内容の妥当性・表現・項目数の適切性について検証後30項目とした．妊婦30名に対するパイロットスタディ，同453名に本調査実施，因子分析等の信頼性検証後，26項目を尺度として開発した．

研究成果の学術的意義や社会的意義
心理社会的ケアは，身体的ケアを支える土台ともなり，精神の安定が，更なる健康行動の促進に繋がる要因であると考えられた．妊娠初期より心身のセルフケアを促す視点は，安心感や心地良い環境を提供，助産師の専門的知識の提供，妊婦を受容し一緒に頑張る伴奏者としての姿勢を継続的に示し，妊婦の主体的な行動・意識を測定するものである．妊娠期セルフケア・アセスメントツールは，妊婦が主体となって医療提供者と共に取り組むことで，良いお産の支援者である助産師の視点も反映され，可視化した本尺度により，その活用が高い出産満足度や育児の自信，さらに育児不安やストレスの軽減につながる可能性がある．

研究成果の概要（英文）：Semi-structured interviews and qualitative analysis were conducted with 10 women　received one-on-one midwifery care during pregnancy and 10 midwives supported the women in developing and evaluating gestational selfcare assessment tool. Pregnancy selfcare consisted of 32 items in 7 categories: as physical selfcare, [Preparation of the body during pregnancy][Nutritional support for the pregnant mothers and fetus][Preparation for breastfeeding], as psychosocial selfcare, [Proactive, self-directed attitude toward My Birth][Emotional attachment with baby][Extra time and leeway gained from receiving one-on-one midwifery care][Emotional capacity to enjoy life during pregnancy]. 30 items were selected after verifying the appropriateness of the content, expression, and number of items. A pilot study was conducted with 30 pregnant women, and the primary survey was conducted with 453 pregnant women. After reliability verification through factor analysis, 23 items were developed as a scale.

研究分野：助産学

キーワード：妊娠期セルフケア　1対1助産ケア　出産準備状態　半構造化面接調査　内容分析

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

妊娠期は身体的，心理社会的に変化に富んだ時期であり，妊婦はそれらに適応しながら自身で心身の状態を整え，出産育児に向けた準備をする必要がある．女性は妊娠が契機となり運動・睡眠・食生活に気をつけるなどの自己管理に努めることで生活習慣が改善され，さらには専門家の指導を守り，学ぶことに熱心になることが，分娩恐怖感や帝王切開率の低下だけでなく，母親役割の自覚の形成に関与し母児が心身ともに順調な経過を辿ることが多数報告されている．

日本の助産師は，正常な妊娠，出産，産褥，新生児には助産師だけで保健指導を実施できるが，医療行為は制限されている中で，正常な妊娠・分娩経過を維持促進するために妊娠期の健康管理（セルフケア）の充足に力を入れてきた．WHO（2013）は，セルフケアは個人の実践だけでなく，医療提供者の支援と相互に作用しながら，実践する側が主体的に取り組む必要性を重視している．妊娠期のセルフケアについての研究は，助産師側の視点での研究がほとんどであり，妊婦が主体となって医療提供者と共に取り組むことが不可欠であるとしている.現在開発されているセルフケア評定尺度として，海外では The Prenatal Health Behavior Scale (PHBS), Nursing History Questionnaire (NHQ), Beliefs Pregnancy Questionnaire (BPQ)などがあり，国内では，妊婦のセルフケア行動意図尺度や妊娠末期の自己管理測定尺度などがある．しかし，1 対 1 の妊娠期ケアを実践している助産師と妊娠期セルフケアを実践できた女性双方のデータを基盤にしたセルフケア実施状況で出産準備状況をアセスメントする尺度はあまり見ない.

２．研究の目的

助産ケアの受け手でセルフケアを実践する女性と女性を支援する助産師両者からの面接法と質的分析手法を用いて尺度作成後，妊婦へのパイロットスタディ等の検証を加えて，妊娠期女性の心身の出産準備を支援するセルフケア・アセスメントツールを開発することを目的とする.

３．研究の方法

（１）助産師と出産後の女性に対する半構造化面接と内容分析による尺度項目の作成

①対象：研究協力施設は，助産師外来・助産師健診を有し，バースプランの活用やフリースタイル出産といった周産期女性の主体性を尊重し支援する診療所および助産所とした．対象施設では，妊娠期女性の妊婦健診受診曜日を固定し，ほぼ一定の助産師が妊娠初期より受け持ちとなる１対１の助産ケアを導入していた．対象者は，助産業務に 10 年以上従事している助産師 10 名および同施設において妊娠期から継続して妊婦健康診査を受診し，妊娠から出産後の経過にかけて異常なく経膣分娩した出産後１年以内の女性 10 名とした.

②データ収集方法：インタビューガイドに基づく半構造化面接法を，研究者が在籍する研究室にて質的研究を学ぶ大学院博士課程で研究する助産師 2 名で行った．面接時間 30～60 分を目安とし，対象者の同意を得た上で面接内容を IC レコーダーに録音し，逐語録を作成した．インタビューガイドは，妊娠期に母児の健康を維持・促進に向けて日常生活および健康管理上で行った活動または指導などの内容から構成した．調査期間は 2019 年 4 月～10 月であった.

③分析方法：データ分析には，Berelson B. の内容分析法を用いた．内容分析は記述に表明された内容を客観的，体系的にカテゴリー化することを目的とする．本研究は，出産に至るまでの妊娠期セルフケア内容を明らかにすることを目的としている．そのため，語られた内容を客観的に扱い，さらに記録単位としてコード化したものを数量的に記述でき，質的研究・量的研究両方の特性を備える内容分析法が適していると考えた．キーワードとなる分析テーマを「妊娠期セルフケア」とし，WHO や妊娠期のセルフケアに関する先行研究を参考に，“妊婦自身が助産師の支援を受けながら，出産育児に向け胎児を含めた健康の保持・促進，また病気を予防するための日常生活および健康管理上の諸活動”と操作的に定義した．この定義を示す内容の文脈を抽出し，記録単位とした．これらをコード化して分類し，サブカテゴリー化，カテゴリー化へと集約した．分析過程において，質的研究法に習熟した研究者よりスーパービジョンを行い，分析結果の信頼性の確保に努めた.

④サブカテゴリー・カテゴリーから項目数・内容の分析を経て項目決定，32 尺度として作成

⑤倫理的配慮：本研究は，琉球大学人を対象とする医学系研究倫理審査委員会より承認を得て実施した，研究参加者には，研究の主旨，研究参加の自由意志，利益，不利益，情報の匿名化や管理，学会等での発表について文書と口頭で説明し，同意書への署名で同意を得た.

（２）質的調査・内容分析を基盤に作成した妊娠期セルフケア・アセスメントツールの検証

①（１）で作成した尺度 32 項目案を用いたパイロットスタディによる量的分析・修正：2020 年 4 月～2020 年 5 月，沖縄県内の助産院・産科施設で出産予定のローリスク妊産婦で 30 名を対象に，妊娠 35 週以降に妊婦健診の待合時間に，作成した尺度および妊娠末期の自己管理評価尺度の自記式質問紙調査，診療録より基本情報、さらに産後２週目および１か月健診時に産後うつ状態質問票，赤ちゃんの気持ち質問票の回答求め，直接回収した.

②パイロットスタディ後に修正された尺度 30 項目による本調査：本調査は，2020 年 6 月 1 日

～2021 年 12 月 31 日に実施された．対象は研究協力施設に通院している 18 歳以上，かつ妊娠経過が正常である妊娠 36 週 以降の 453 名の妊婦を対象に実施した．セルフケア実施に影響する合併症等を有している者は除外した 383 名を分析対象とした．本尺度と比較する他の尺度として，眞鍋らの妊婦のセルフケア行動意図尺度（セルフケア行動動機づけ尺度を参考に開発され，異常の早期発見や予防に特化した尺度で，表面妥当性，内容妥当性，構成概念妥当性，弁別的妥当性，基準関連妥当性が検証され，Cronbach の α 係数＝0.90）を用いた．

③妊娠期セルフケア・アセスメントツールの開発：本アセスメント尺度および他の研究者開発したセルフケア尺度との比較分析において，尺度項目分析により，床効果および I-T 相関，探索的因子分析の過程で因子・項目を抽出し，尺度全体および各因子の Cronbach の α 係数と折半法を算出する．最終的 に因子・項目の検討・分析後，アセスメントツールとして開発する．診療録より基本情報、産後 2 週目の産婦健診および 1 か月健診時の産後うつ状態質問票，赤ちゃん気持ち質問票および母児の情報との比較分析により本尺度の有効性を確認する．

４．研究成果

（１）助産師 10 名と出産後の女性 10 名に対する半構造化面接とその逐語録の内容分析

①面接対象者の属性：出産後女性の年齢分布は 26 歳～40 歳，平均年齢 34.2±3.9 歳，初産婦 5 名，経産婦 5 名であった．助産師の年齢分布は 38 歳～80 歳，平均年齢 54.6±11.7 歳で，臨床助産師経験年数は 15 年~51 年，平均 28±11.5 年であった．

②妊娠期セルフケアを構成する 3 つの身体的カテゴリーと 4 つの心理社会的カテゴリーの抽出：逐語録から，妊娠期セルフケアは 578 記録単位が抽出された．分類後，7 カテゴリー，27 サブカテゴリーが生成され，身体的側面に当たる 3 カテゴリー（271 記録単位，46.9%）は，【妊娠期の身体づくり】【母児を育む栄養】【母乳育児への備え】が得られた．また心理社会的側面に当たる 4 カテゴリー（307 記録単位，53.1%）は，【お任せにならない「私のお産」】【児への愛着】【1 対 1 の助産ケアがもたらす時間と空間】【妊娠生活を楽しむ心の余裕】が抽出された．出産後女性，助産師共に，妊娠期セルフケアに関する特徴的なコードを身体面，心理社会面に分けて抽出できた．

③妊娠期セルフケアを構成するカテゴリーの考察－身体面－：3 つのカテゴリーが得られ，【妊娠期の身体づくり】の<正しい姿勢と運動が柱>はケア全体でも最も多く，身体的セルフケアの主軸として位置づけられた．ウォーキングやマタニティビスク，マタニティヨガを含む適度な運動は，肥満予防や分娩時間の短縮など健康維持・増進に寄与し，また不安や抑うつを軽減にも影響するとされ，妊娠初期からの姿勢の矯正は，体重コントロール，冷えの予防行動，マイナートラブル予防といった行動につながる．<妊娠している身体に慣れて動ける>は，助産師独自の視点であり，他のセルフケアカテゴリー内容の促進に繋がるサブカテゴリーであると考えられる．各カテゴリーの記録単位数から検討すると，出産後女性は【母児を育む栄養】を【妊娠期の身体づくり】についで 2 番目に重視しているといえ，助産師による妊娠中の食事管理についての支援や女性自身の情報収集のもと<児の発育に目を向けた食生活> <塩分・脂質の摂取を控える> <貧血を意識した食材やサプリメント>で妊娠中に摂取を推奨する食事や栄養により高い意識をもって食事内容を選択していたと考えられる．【母乳育児への備え】では，より個別的で妊娠期から育児期におけるトラブルを予防する乳頭乳輪ケアの実施の可否の判断をしていた．<新生児の吸啜を模倣したケア>では，母乳育児に備え，実際の新生児の吸啜の程度（強さ，深さ）を模して頻回授乳相当の回数での乳頭乳輪ケアを勧める内容であった．<継続に繋がる痛みのないケア>では，妊婦に「乳頭ケアで痛い」思いをさせないことでケアの継続を促すカテゴリー内容であった（表 1）．

④妊娠期セルフケアを構成するカテゴリーの考察－心理社会面－： 4 つのカテゴリーが得られ，【お任せにならない「私のお産」】が 107 記録単位と，セルフケア全体を通して 2 番目に多い記録単位数を示し，その中でも<出産を知って恐怖感を軽減>する妊娠期セルフケアを出産後女性，助産師共に重視していた．<初期のバースプランでの自覚> <命を預かる覚悟> <納得のいく産院の選択>といった出産に向かう妊婦の主体性を示すカテゴリーである．妊娠期から出産に対し主体としての自覚を持ち，納得のいく出産を考え，それを実現させる産院を選択し，何が起こるかわからない出産の中で命を預かる覚悟をもつことは，その後の育児生活への更なる自信や満足につながると考えられた．【1 対 1 の助産ケアがもたらす時間と空間】では，<認められ素直に話し合える心地のいい妊婦健診>が心理社会的面で最も多い 53 記録単位を示し，妊婦との関係性の維持を重視する意図的な関わりが，助産師への信頼を高め，前向きな気持ちで妊婦健診に足を運ぶと考えられた．心理社会的側面では，【児の愛着】の<育児生活をイメージし家族を交え準備する>や【1 対 1 の助産ケアがもたらす時間と空間】において，<「話す」に慣れ SOS を発信できる>も妊娠期から家族調整等の育児準備を行い，助けが必要になった時に助けを求める，些細なことであっても SOS を発信できる力の獲得を助産師は重要視していた．【妊娠生活を楽しめる余裕】では，好きなことをして妊娠生活を楽しむ<義務的にならず好きなことをする>が語られ，女性の最も多い記録単位数となった<サポーティブな夫や家族，ピア>の存在は，妊娠期の女性が精神的に健康な状態で妊娠生活を過ごしていくため，夫を含めた家族からのサポートを重要視していた（表 2）．

表１　妊娠期セルフケアを構成するコアカテゴリーおよびサブカテゴリー　《身体面》

3【コアカテゴリー】		16<サブカテゴリー>	記録単位数 出産後女性	助産師	合計
1.【妊娠期の身体づくり】	妊娠初期から	1-1 <正しい姿勢と運動が柱>	27	28	55
		1-2 <後期の体重増加を意識した日々の管理>	12	16	28
		1-3 <冷えない生活の工夫>	13	9	22
		1-4 <不快症状への対処>	10	1	11
		1-5 <妊娠している身体に慣れて動ける>	1	18	19
		1-6 <風邪対策と歯科受診>	2	0	2
	妊娠末期	1-7 <骨盤底筋体操>	11	16	27
		1-8 <伸展を促す会陰マッサージ>	4	4	8
		1-9 <陣痛を誘発する乳輪乳頭マッサージ>	0	1	1
		小計	80	93	173
2.【母児を育む栄養】		2-1 <児の発育に目を向けた食生活>	15	12	27
		2-2 <塩分・脂質摂取を控える>	9	3	12
		2-3 <貧血を意識した食材やサプリメント>	17	5	22
		2-4 <「食べる」意識を持つ>	8	5	13
		小計	49	25	74
3.【母乳育児の備え】		3-1 <個別に応じた乳輪乳頭ケア>	5	14	19
		3-2 <新生児の吸啜を模倣したケア>	0	3	3
		3-3 <継続に繋がる痛みのないケア>	0	2	2
		小計	5	19	24

表２　妊娠期セルフケアを構成するコアカテゴリーおよびサブカテゴリー　《心理社会面》

4【コアカテゴリー】	11<サブカテゴリー>	記録単位数 出産後女性	助産師	合計
4.【お任せにしない「私のお産」】	4-1 <出産を知り恐怖感を軽減>	21	31	52
	4-2 <初期のバースプランで持つ自覚>	14	23	37
	4-3 <納得できる産院の選択>	11	0	11
	4-4 <命を預かる覚悟を持つ>	5	2	7
	小計	51	56	107
5.【児への愛着】	5-1 <育児生活をイメージし家族を交え準備する>	15	30	45
	5-2 <お腹の児との対話と母子健康手帳記録>	18	2	20
	5-3 <見て触れて感じる児の存在>	8	6	14
	小計	41	38	79
6.【1対1の助産ケアがもたらす時間と空間】	6-1 <認められ素直に話し合える心地のいい妊婦健診>	25	28	53
	6-2 <「話す」に慣れ SOS を発信できる>	0	15	15
	小計	25	43	68
7.【妊娠生活を楽しめる心の余裕】	7-1 <サポーティブな夫や家族，ピア>	27	2	29
	7-2 <義務的にならず好きなことをする>	9	15	24
	小計	36	17	53

⑤結論：身体的セルフケアに加え，心理社会的セルフケアを重視していることが記録単位数からも明らかとなった．心理社会的ケアは，身体的ケアを支える土台ともなり，精神の安定が，更なる健康行動の促進に繋がる要因であると考えられた．妊娠初期よりバースプラン等を活用し，心身のセルフケアを促す視点は，安心感のある心地の良い環境の中で，助産師が専門的な知識を提供し妊婦を受容し一緒に頑張る伴奏者としての姿勢を継続的に示していた．7 つの『妊娠期セルフケア』は，出産育児に向けて女性の心身の出産準備状態を整えるセルフケア内容で，バースプラン等を活用し妊娠初期からの切れ目のない支援により促進される．また，質的分析に精通したスーパーバイザーによる項目内容･項目数の妥当性検証により 32 項目の尺度を作成した．

（２）妊娠期セルフケア・アセスメントツール案の検証

①32 項目尺度案を用いたパイロットスタディ：2020 年 3 月～4 月，研究協力施設で出産予定のローリスク妊婦 30 名を対象にパイロットスタディを実施，尺度内容・項目数の検討・修正を行った．各項目は，「5（非常にあてはまる）」「4（あてはまる）」「3（だいたいあてはまる）」「2（少しあてはまる）」「1（全くあてはまらない）」の 5 件法にて測定，得点が高いほどセルフケアが実施されているとした。表面妥当性の検証結果，天井効果やフロア効果を示し歪度・尖度の極端値 2 項目を削除，30 項目（Cronbach のα係数は 0.906）とした．

②修正後 30 項目尺度案による本調査：2020 年 6 月～2021 年 4 月，研究協力施設に通院している 18 歳以上かつ妊娠経過が正常である妊娠 36 週 以降の 453 名の妊婦を対象に実施した．セルフケア実施に影響する合併症等を有している者等を除外した 383 名を分析対象とし量的分析後，3 因子 23 項目の尺度を作成した．第一因子（12 項目），「妊婦健診や助産外来で何でも気軽に話せる」「出産後はじまる育児生活について家族と相談している」「自分で産む覚悟をもっている」等から，因子名を≪出産・産後に向けた心理社会的因子≫とした．第二因子（5 項目）は，「赤ちゃんの成長を考えて食事をしている」「1 日 3 食を目安に食事を摂っている」等から，因子名を≪母児を育む栄養因子≫とした．第三因子（6 項目）は，「身体を動かしたり、歩いたり、運動をしている」「乳頭乳輪マッサージやオリーブケアなどをおこなっている」等から，因子名≪出産・産後に向けた身体的因子≫とした（表 3）．

表 3　探索的因子分析（主因子法，プロマックス回転）

因子名と尺度項目（全体のα係数＝0.916）		因子負荷量 1	2	3
第 1 因子　出産・産後に向けた心理社会的因子　α＝0.913				
26	妊婦健診や助産外来で何でも気軽に話せる	0.840	-0.095	-0.043
25	妊婦健診や助産外来で、素直に気持ちを伝えることができる	0.799	-0.074	-0.032
28	夫や家族とは何でも話せる	0.798	-0.067	-0.061
27	助けてと素直に誰かに伝えられる	0.768	-0.118	0.052
29	夫や家族からのサポートがある	0.705	-0.1	0.021
21	出産後はじまる育児生活について家族と相談している	0.696	0.017	0.089
20	出産後の育児のイメージをしながら過ごしている	0.658	0.153	-0.027
24	お腹の中の赤ちゃんの成長や様子をイメージしながら過ごしている	0.601	0.239	-0.075
22	お腹の赤ちゃんへ声をかけるなど、お腹の赤ちゃんとの時間をもっている	0.582	0.255	-0.03
19	自分で産む覚悟をもっている	0.519	0.008	0.064
30	妊娠生活は楽しい	0.469	0.089	0.079
18	出産のイメージをしながら過ごしている	0.431	0.196	0.128
第 2 因子　母児を育む栄養因子　α＝0.823				
14	塩分を控えめにしている	-0.101	0.881	-0.053
15	脂質を控えめにしている	-0.096	0.824	0.05
11	赤ちゃんの成長を考えて食事をしている	0.081	0.764	-0.039
12	貧血予防の為に食事の工夫をしている	0.047	0.699	-0.003
16	1 日 3 食を目安に食事を摂っている	0.064	0.406	-0.034
第 3 因子　出産・産後に向けた身体的因子　α＝0.767				
2	身体を動かしたり、歩いたり、運動をしている	-0.059	0	0.708
1	正しい姿勢を保ちながら生活している	-0.064	0.11	0.613
3	適正な体重増加に向けて、行動している	-0.069	0.264	0.562
5	妊娠後もスムーズにからだを動かせている	0.102	-0.07	0.538
17	乳頭乳輪マッサージやオリーブケアなどをおこなっている	0.03	-0.119	0.532
6	便秘や腰痛などの不快な症状に対して、何かしらの対処をしている	0.252	-0.063	0.511
初期の固有値	累積%	36.80	47.51	53.82
回転後の負荷量平方和		7.082	5.327	5.149
因子相関行間列				
第 1 因子		1		
第 2 因子		0.489	1	
第 3 因子		0.554	0.615	1

信頼性の検討において，Cronbach のα係数は，尺度全体で.916，第 1 因子≪出産・産後に向けた心理社会的因子≫.913，第 2 因子≪母児を育む栄養因子≫.823，第 3 因子≪出産・産後に向けた身体的因子≫.767 となった．折半法は，偶数項目総得点と奇数項目総得点における相関係数で強い有意な正の相関（r=.96)が認められた．基準関連妥当性では，23 項目の合計得点を基準変数とした妊娠末期の自己管理測定尺度との spearman の準備を算出，妊娠末期の自己管理測定尺度と本尺度の合計得点間の順位相関係数 r=.778，因子間 r=.309～.763 であり，中程度から高い有意な正の相関が認められた（＜.001)．妊娠期の異常や予防に焦点をあてて作成された「妊娠末期の自己管理尺度」と相関が認められたことは，正常な妊娠経過から逸脱した妊婦のセルフケアもある程度網羅されいている内容であることが確認できた．本ツールスコア集計の得点範囲は 0～115 点，中央値は 65.6，尤度関数，LOC 曲線等での解析でカットオフポイントを 82.5 と推定し本尺度の低得点・高得点の範囲を決定した．産褥期の「赤ちゃんに対する気もち尺度」「エジンバラ産後うつ評定尺度」と本ツール低得点群・高得点群との比較分析の予測的妥当性として，本尺度の得点が高ければ，産後のうつ症状や赤ちゃんへの否定的な気持ちは低下するとした．妊娠期の心理社会的因子得点と産後 2 か月と 1 か月の赤ちゃんへの気持ち質問票が低い負の相関が認められたが，産後うつ症状とは関連性は認められなかった．弁別的妥当性における GP 分析では，尺度項目の上位群・下位群における差の検定結果，妊娠期の異常や予防に焦点をあてて作成された「妊娠末期の自己管理尺度」と相関が認められた．正常な妊娠経過から逸脱した妊婦のセルフケアもある程度網羅されいている内容であることが確認でき，弁別性の確認として，高得点群の各項目の得点平均値は高く，低得点群において得点平均値は低くなるよう弁別される．GP（Good-Poor）分析の結果，高得点群の上位（25%，89 点以上，103 人）では，下位群（25%，70 点以下，100 人）における各項目平均値の差の検定で，全項目において上位群の得点平均値が高く有意差が認められた．予測的妥当性では，産後のうつ症状や赤ちゃんへの否定的な気持ちの関連性は認められなかった．妊娠期のセルフケア・アセスメントツールの信頼性と妥当性は一定程度確保され，本ツールの活用により，妊娠期女性の潜在能力が発揮できるような支援や助産ケアの質の担保の一助になること，正常な妊娠経過から逸脱した妊婦のセルフケアもある程度網羅されいている内容であることが確認でき対象の拡大が期待される．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 Yumiko Endoh, Hiroshi Endoh, Yoko Tamashiro, Takehiko Toyosato, Fujiko Omine, Masaki Takeda, Minoru Kobayashi	４．巻 10
２．論文標題 Child-rearing assistance enhances physical activity and health-related quality of life among Japanese grandmothers	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Journal of Intergenerational Relationships	６．最初と最後の頁 1,20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/15350770.2021.1965064	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 嵩元リカ，大嶺ふじ子，遠藤由美子，玉城陽子，高山智美，與那嶺佳奈子，川満恵子	４．巻 61 (1)
２．論文標題 異常分娩を経験した女性の出産体験3ヶ月間のレジリエンスと抑うつ状態　-正常分娩を経験した女性との比較から-	５．発行年 2020年
３．雑誌名 母性衛生	６．最初と最後の頁 112-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yumiko Endoh, Takehiko Toyosato, Takao Yokota, Chikako Maeshiro, Misuzu Takahara, Yumiko Henna, Yoko Tamashiro, Midori Kuniyoshi, Yasuko Koja	４．巻 38 (1-4)
２．論文標題 Perception of research difficulties affects staff nurses’ motivation towards research participation: The impact of understanding research value and collegial support	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Ryukyu Medical Journal	６．最初と最後の頁 13-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Tamayo Hasegawa, Yasuko Koja, Yumiko Endoh, Yoko Tamashiro	４．巻 38 (1-4)
２．論文標題 Japanese fathers’ experience with children with profound intellectual and multiple disabilities	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Ryukyu. M.J	６．最初と最後の頁 21-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 徳元裕子，豊里竹彦，眞榮城千夏子，平安名由美子，遠藤由美子，照屋典子，玉城陽子，高原美鈴，與古田孝夫	4．巻 84（1）
2．論文標題 沖縄県の地域住民の経済状況と地域愛着が親扶養意識に及ぼす影響について	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本健康学会誌	6．最初と最後の頁 3-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yoko Tamashiro, Yumiko Endoh, Takehiko Toyosato, Takao Yokota, Fujiko Omine, Kumiko Tsujino	4．巻 37
2．論文標題 Physiological and nutritional intake characteristics of pregnant women according to their recommended gestational weight gain in relation to the birth weight of their full-term infants	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Ryukyu Med. J.	6．最初と最後の頁 61-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yoko Tamashiro, Fujiko Omine, Yumiko Endoh, Tsugiko Gima, Chikako Maeshiro, Noriko Toyama, Rika Takemoto, Tomomi Takahara, Miki Hirata	4．巻 4
2．論文標題 Study of midwifery care in 6 Obstetricalfacilities in Okinawa-Self-Completed Retrospective Questionaires for One Month Postpartum Women	5．発行年 2017年
3．雑誌名 International Journal of Nursing & Clinical Practices	6．最初と最後の頁 254-259
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15344/2394-4978/2017/254	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　0件／うち国際学会　8件）

1．発表者名 與那嶺佳奈子，嵩元リカ，遠藤由美子，玉城陽子，大嶺ふじ子
2．発表標題 妊娠期女性の心身のセルフケア促進につながる助産ケアの検討 ；助産師と出産後の女性に対する面接調査・内容分析から
3．学会等名 第77回日本助産師学会
4．発表年 2021年

１．発表者名 宮里直美，桑江喜代子，垣花美智江，川満恵子，玉城陽子，遠藤由美子，大嶺ふじ子
２．発表標題 体重増加が出産へ与える影響についての検討 －沖縄県の有床助産所を受診した妊産褥婦 295 人の分析－
３．学会等名 第77回日本助産師学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 桑江喜代子，宮里直美，垣花美智江，川満恵子，大嶺ふじ子
２．発表標題 沖縄県助産師会母子未来支援センター活動報告 （2013 年～2020 年）
３．学会等名 第77回日本助産師学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山内れい子，桑江喜代子，宮里直美，大嶺ふじ子
２．発表標題 沖縄県助産師会母子未来支援センターにおける若年妊産婦の居場所事業 （2018 年～2021 年度）
３．学会等名 第77回日本助産師学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kanako Yonamine, Fujiko Omine, Yumiko Endoh, Yoko Tamashiro, Rika Takemoto, Tomomi Takayama, Manami Uehara
２．発表標題 Studies for Midwifery Care with Pregnant Women Promoting Physical and Mental Selfcare -Interview and Content Analysis Methods for Post Delivery Women and Midwives -
３．学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Yoko Tamashiro, Yumiko Endoh, Rica Takemoto, Manami Uehara, Kanako Yonamine, Tsugiko Gima, Fujiko Omine
２．発表標題 Changes in the ovulation/anovulation cycle, diet, and mental health of nursing students in Okinawa, Japan: an intervention study with the basal body temperature measurement
３．学会等名 The 6th WANS, Osaka, Japan, Feb. 28-29.（国際学会）
４．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 Kanako Yonamine, Fujiko Omine, Yumiko Endoh, Yoko Tamashiro, Rika Takemoto, Tomomi Takayama, Manami Uehara, Yoko Oshiro
２．発表標題 Studies for Midwifery Care with Pregnant Women Promoting Physical and Mental Selfcare-Interview and Content Analysis Methods for Post Delivery Women and Midwives-
３．学会等名 The 6th WANS, Osaka, Japan, Feb. P2-134.（国際学会）
４．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 Yoko Tamashiro, Yumiko Endoh, Rika Takemoto, Manami Uehara, Tsugiko Gima, Fujiko Omine
２．発表標題 Relationships between Mental Health, Nutrient Intake and Menstruation of Nursing Students
３．学会等名 50th Asia-pacific Academic Consortium for Public Health Conference, Malasia.（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Rika Takemoto, Fujiko Omine, Yumiko Endoh, Yoko Tamashiro, Tsugiko Gima, Tomomi Takayama, Manami Uehara, Shinobu Yamada Keiko Kawamitsu
２．発表標題 Relationship Between Depression and Resilience among Women Three Months Postpartum
３．学会等名 50th Asia-pacific Academic Consortium for Public Health Conference, Malasia.（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yumiko Endoh, Yumeno Maejo, Liu Ping, Yoko Tamashiro, Kanako Yonamine, Rika Takemoto, Manami Uehara, Fujiko Omine
２．発表標題 Characteristics of Health Status Using Orienral Medical Scale by Generation among Femalr Nursrs in Okinawa, Japan
３．学会等名 50th Asia-pacific Academic Consortium for Public Health Conference, Malasia.（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Fujiko Omine
２．発表標題 Factors affecting the learning implementation of midwife skills in-service training in South Sudan,
３．学会等名 第197回保健科学研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Fujiko Omine
２．発表標題 The Efficacy of Employing Full-time Midwives in Community Maternal and Child Health Services
３．学会等名 第164回琉球大学医学部保健科学研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Ping Liu, Fujiko Omine, Yumiko Endoh, Yoko Tamashiro Rika Takemoto, Hanae Henzan
２．発表標題 Health-promoting lifestyle among nurses with the “Unillness status” in Okinawa, Japan: across-sectional survey
３．学会等名 49th Asia-pacific Academic Consortium for Public Health Conference, , Yonsei University . Seoul, South Korea（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Tsugiko Gima, Kumiko Tsujino, Fujiko Omine, Yumiko Endoh, Yoko Tamashiro and Manami Uehara
２．発表標題 Comparison of Characteristics of Sleep Patterns among 3-year-old Children in Five Cities in Okinawa, Japan
３．学会等名 TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017. Culture, Co-creation, and Collaboration for Global Health. Bangkok, Thailand（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	豊里　竹彦 (TOYOSATO TAKEHIKO) (40452958)	琉球大学・医学部・教授 (18001)	
研究分担者	玉城　陽子 (TAMASHIRO YOKO) (70347144)	琉球大学・医学部・助教 (18001)	
研究分担者	遠藤　由美子 (ENDOH YUMIKO) (90282201)	琉球大学・医学部・准教授 (18001)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関